



慶應義塾大学ビジネス・スクール

「フィラデルフィア」授業ノート

5

映画『フィラデルフィア』について

米国ペンシルバニア州フィラデルフィアにある名門法律事務所において弁護士のベケットは将来を嘱望されていた。ベケットは優秀でかつ愛される性格であり、事務所内でのホープであった。
しかし、彼には事務所の上層部には告げていない秘密があった。彼が同性愛者であり、恋人のミゲルと同居していることである。保守的な社風の弁護士事務所では同性愛者はタブーであった。秘密をもつことの心苦しさはあったものの、ベケットは事務所が今後最も力を傾ける予定の顧客を任せられ、希望と仕事へのやる気に燃えていた。

ところがある日、彼は体調不良で検査を受け、医師から彼がエイズに感染していることが宣告される。長い葛藤の末ベケットはこの事実を受け入れ、事務所には秘密にしつつ仕事に専念することにした。しかし、時間の経過と共にエイズを原因とする様々な症状がベケットの体に現われ、隠し切れなくなる。事務所側はベケットがエイズ患者であり、同性愛者であるということが明らかになると、「仕事上のミスがあった」とでっち上げ、ベケットを解雇する。ベケットは自らの名誉回復と、不当な差別に対して闘うために事務所側を不当解雇で告訴する。

15

訴訟の開始からベケットは大きな壁にぶつかる。自分とパートナーを組む弁護士を見つけることが出来なかった。人種への偏見と同性愛への強い拒絶反応の強い保守的なフィラデルフィアの地では、この種の裁判は「絶対に関わってはいけないこと」であった。知り合いにベケットが弁護の依頼に行くと、文字通り全ての弁護士は門前払いをした。自分の体調が悪い状態では弁護士のパートナーの存在は裁判に不可欠であった。そこで、手あたり次第に弁護士に依頼するが、ごとく断られ、ようやく曾て相手方弁護士として闘ったことのあるミラー弁護士から好感触を得ることができた。

20

25

このケースは授業のために法政大学ビジネススクール准教授高田朝子によって作成された。経営管理の巧拙を記述したものではない。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8523 神奈川県横浜市港北区日吉本町2丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright© 高田朝子 (2008年7月作成)